

近況まとめて報告

haskap
NEWS LETTER

～コモンズの現地から発信する～

勇払原野のSPIRIT

コモンズの視線

本ニュースレターは、今号からNPO苫東コモンズの公式なものから、少し視点を代えて勇払原野ウォッチャーとしてやや個人的なニュアンスでお送りいたします。当方が70歳を迎えた頃から若手会員と同じ活動メニューをこなすのを辞退し自称シニア・メニュー実践に切り替えたことと、手薄になっていた里山の雑木林風景を創出する静川のプログラムをもう一度本格化するねらいが背景にあります。苫東コモンズの木こり部隊（苫東ウッドィーズ）の大島山林から直線で3、4km離れた静川エリアを拠点に、雑木林とハスカップの風土ウォッチをしていきます。

またこの方が、古くから苫東プロジェクトとコモンズに関わられた会友や関係者の方々に、苫東緑地を通してみた勇払原野の現在を具体的に情報提供できそうだと考えたからです。実際、苫東はこの50年で大きく変わりました。関係者のご尽力によって、国と地方自治体、そして民間が進めてきた地域開発がようやく本格化した証左と言えます。が、ご紹介する内容は当方が見て感じてきたもので世間に公認も公表もされていない生のもので独断的な可能性は大です。ご笑覧いただければ幸いです。（草苅）

参考 web 地域活動15年とこれから <http://hayashi-kokoro.com/commons00.html>

雑木林だより <http://hayashi-kokoro.com/zouki00.htm>

Topic 1 柏原のハスカップ自生地さらに変化？



雑木林とハスカップのコモンズの利用という慣習にヒントを得て始まった苫東コモンズのNPOが、ハスカップ自生地、「ハスカップサンクチュアリ」の群落の本格的な調査を行ったのが平成27年の5月と6月。乾燥化して樹林地化している、という自らの観察結果をGPSで検証したものでそのデータは4年後の平成31年に『ハスカップとわたし』という冊子にNPOの自費でまとめ公表した。

出版から7年後の今年5/17、当時の調査地をかつてのメンバーと踏査したところ、ハスカップが自生していた「ヤチハンノキ-ホザキシモツケ群落」はその名のとおりホザキシモツケがさらに繁茂し樹林地化が進んだようにみえるばかりでなく、ハスカップの花がほとんど見えなかった。ホザキシモツケに行く手を阻まれるためにハスカップ摘みという風物詩は終わったと直感した。当時、アセスメント上の措置として「環境維持水路」を設けたが乾燥地化と樹林地化は防げないのか？ポストブルーベリーとして世界的に注目されるハスカップ原種の遺伝子プールはどうなるのか？自生地はこのまま衰退と消滅に向かうのか？

*世界におけるハスカップの位置付けなどは北大・星野洋一郎教授の下記レポートに詳しい。

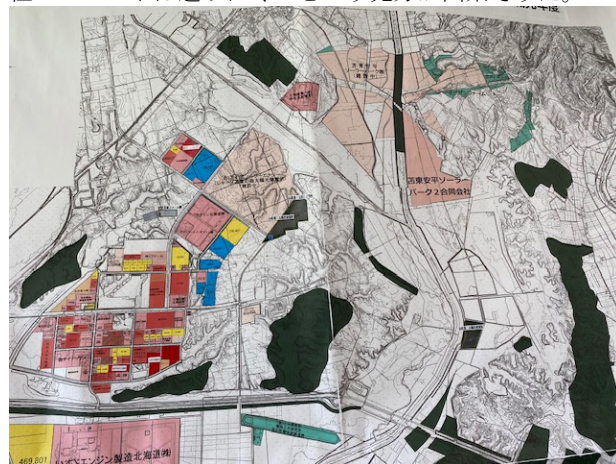
<http://hayashi-kokoro.com/commons-report.html>

Topic 2 R234 沿い柏原北西部立地で埋まる

個人的な印象として、苫東における近年の春先のヒグマ出没が攪乱状態のように感じる。いきなり弁天浜で目撃され

たり大島山林にも現れるようになった。目撃情報＝ヒグマの存在有無、に直結はしないとしてもヒグマにとって何らかの環境変化があったのではないかな？

そう感じていた昨年夏、苫東会社を訪ねし企業立地図をみて気づいたのだが、柏原工業地区の北西部はほぼ立地企業で埋まっていたのである。ヒグマ「トラジロウ」の捕獲&追跡調査で分かったように、ヒグマは樽前支笏湖方面からウトナイ湖を通して柏原、静川を経由し厚真の三菱マテリアルの林に移動するルートがあり、ルート上の柏原のアイシン精機の構内を堂々と横断することもあった。が、現在このルートは通りにくいという見方が出来そうだ。



ということはヒグマから見ると西は勇払川、東は遠浅川・安平川という河川敷にルートを振られ、人目に触れず勇払や弁天浜で目撃される、というケースが多くなったのではないかな？従来のヒグマ移動ルートが攪乱されているとすれば苫東内の思いがけないどこかで遭遇するとも限らない。目撃情報に注意を払いつつ突然の遭遇には備えたい。

Topic 3 電気牧柵なしで萌芽更新は可能か？

苫東における保全すべき対象群落としてミズナラ-コナラ林がある。保全方針を検討した昭和50年前後の道による自然環境調査報告書では、苫東のこれはまとまったコナラ群落としては国内の北限に当たるとして指定したもの。旧苫東会社では、この群落が広範に広がる一帯で、ほど木生

産と修景を兼ねた密度管理作業を平成2年から行ってきたが、除間伐後は、林内照度の低さとシカの食害によって天然の萌芽更新が見られないことがわかり課題となっていた。

このサイクルを解決するため苫東会社はNPO苫東コモンズに、保育地における萌芽状態と小面積皆伐後の天然更新に関する調査を委託し継続観察を実施してきた。



平成30年に実施した天然更新の試験(30m×30m)では、シカの侵入と食害を防ぐ電気牧柵で囲んだところ、被害は全くなく萌芽更新はもちろん各種の天然下種によって旺盛な植生復元が見られ、現在ヘクタールあたり2万～3万本という驚異的密度で推移している(上の写真)。



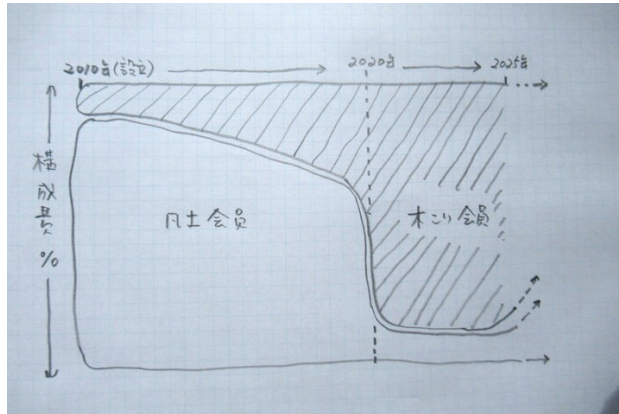
令和6年秋からの大島山林の徐間伐では、一面に同面積の皆伐試験地を設け電気牧柵なしでどのように復元するか調査を始めることとした(上の写真)。現在天然下種、萌芽とも更新は順調で、もしこのまま更新が進めば、小面積皆伐の応用可能性が改めて注目されることになる。

Topic 4 コモンズは木こり部隊と風土会員で

2025年度早々に、大島山林の除間伐に直接タッチしない会員が5名入会した。除間伐作業に参加して冬期間集めた材を薪として受領するグループからは外れる会員で、勇払原野の風土をコモンズとして共有するという点に主眼を置く。近年は便宜上、チェーンソー作業に従事する会員を苫東ウッドーズまたは木こり会員、風土全般を楽しむ会員を風土会員と呼んでいるが、設立当初は下図のとおり圧倒的に風土会員が主流で、その中には地元の方、苫東のOB、自然愛好者、NPOを応援して時々訪問してくる山仲間、団体会費で支援してくれる企業数社などが含まれていた。

当時チェーンソーを持って動いていたのは技術顧問の

abe-bさんとわたしくらいで、NPO予算でチェーンソーなど器具を貸与して少しずつ木こり会員が増えてきた。設立10周年の2020年は、活動予算の目途もつき寄付で活動を支援してくれた方々に会費なしの会友に移行してもらった関係で、正会員の構成は図のように木こり会員の比率が圧倒的に高くなった。苫東のハスカップ畑でハスカップ摘みが不作で出来なくなったことも大きかった。



設立16年目に入った2025年からは、苫東コモンズ全体として、森の手入れにほぼ1年を投じる会員と、雑木林とハスカップなど風土をまんべんなく楽しむ会員とが協働するので、その接点なり接線なりを見つきたい。

編集後の書ききれなかった雑話など

■2025年度は苫小牧市の生物多様性戦略が市民のパブリックコメントや議会審議を経て動き出す模様だ。関わった委員会の策定作業の中では、コモンズが注力するハスカップや雑木林の位置づけが議論され少し明確になりそうだ。これまでの自主活動が初めて自治体の施策と重なることになるかも。■シニア・メニューをこなす当方は、苫東から預かっている雑木林センター(静川小屋)の小屋番をしながら周辺の里山景観維持と修景を行っている。フットパスも小屋の手入れもあるので年間80日通っても暇すぎることがない。前期高齢者にとって体力に見合った晴林雨読生活は心身の健康にも大いにプラスで、訪問する同好の士が増えたのは楽しみだ。■風土会員の入会や探鳥会(5/24)とともに、薪割り薪積みなどの作業を地域や道央圏の方々にも楽しんでもらおうというプロジェクト(6/21)も若いメンバー中心で動き出す。NPOの運営が世代交代していくひとつの兆しともいえ、こういう企画が自発的に生れ、進むのは実に喜ばしい。欲を言えば、現地に30分程度でアクセスできる地元の人の方がもう少しいればなお良し、か。■今年も川エビに始まりアイヌネギ、ボーファー、コシアブラ、スドキ、ワラビなど春一番の山野河海の恵みを味わうのに結構忙しかった。海だけはサクラマスもトキシラズも自分では獲れず地元産道内産で済ました。地元の毛ガニやトキシラズはこれからだ。山野河海に原野を加えた地域環境は恵みの宝庫。■恵みの宝庫と言え7月はハスカップ。乾燥で枯れ始めたように見える自生地とその周辺には、今年はもっと時間を割いてみようと思う。初夏の風物詩「ハスカップ摘み」を復活させるためには、採取できる原野をもう一度探してみる必要がある。幸い、こちらには土地勘がある。さて、どこまでいけるか。■6/3は北大の星野教授を訪問し、ハスカップ自生地のこれらについてアドバイスを受け意見交換した。子供たちの「探究学習」という新たなキーワードも得た。検討してみたい。(草薙)

e-mail kt-884-556@nifty.com 携帯 090-6999-2765